

武蔵野日曜聖書講筵

我れ地にて火を投ぜんとて来れり

——ルカ伝第12章49～50節——

1991年3月10日

小池辰雄

十字架と聖霊は絶対不可離 霊火 十言 火の如き福音 四位一体 キリストの十字架の碎け
火の預言者 愛の炎 霊火人

【ルカ12】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり^{きた}。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思ひ逼ること如何許ぞや^{いかばかり}。51 われ地に平和を与えんために来ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

●十字架と聖霊は絶対不可離

ルカ伝9章51節から、キリストがエルサレムへ向かつてガリラヤを出られた、エルサレムへの旅の中の一箇所です。

49 我は火を地に投ぜんとて来れり^{きた}。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

この日本語の訳は非常にいい訳です。

50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思ひ逼ること如何許ぞや^{いかばかり}。

この二節。そして

51 われ地に平和を与えんために来ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

非常に烈しい言葉です。水を割らずにキリストはおっしゃる。いわゆる平和はみんな偽りの平和だ、本当の平和はそんなものじゃないと。

「自分は火を投ずるためにやって来た。この火が燃えたら、もう他は心配ないんだ」

と。もちろん、これは聖霊の火です。聖霊の火をキリストはいきなり燃やしたかというところ、燃やさなかった。ということは、その後の50節に、

「されど我には受くべきバプテスマあり」



とは十字架のことです。

「十字架を通らなければ、実はこの火は投ぜられないんだ」

と。それがペンテコステなんです。地上でキリストは、彼自身はもちろん火でしたけれども、それを弟子たちに伝えるわけにはいかなかった。それは、

「贖罪という驚くべき事態を、十字架の贖罪ということを通らなければ、聖霊を降だすわけにいかない」

と。これがすごいところなんです。ある人たちは「十字架、十字架」といつて、聖霊がさっぱり出てこない。今度は反対に、聖霊を重んずると、「聖霊、聖霊」といつて、十字架がいい加減になったら大変だ。この十字架と聖霊は絶対不可離の関係にある。十字架を通らなければ、キリストは聖霊を降ださなかつたんですから。これが、

「思いせまることいかばかりぞや」

という内容です。

「本当はすぐ与えたいが、そうはいかないんだ」

と。二千年前にキリストはもう既に十字架を、贖罪を果たしておられるんだから、我々は十字架を、このキリストの現場を、その現実を本当に受けとつていかないと、聖霊も本ものにならない。今度は、聖霊を受けとらなければ、十字架も本ものにならない。ところが、一般のキリスト教界でこのことを本当に身で受けとつている者が一体幾人いるか。だから、

「本当のクリスチャンは天才より少ない」

とキルケゴールが言ったのは非常に皮肉な言葉だけれども、非常に穿った言葉です。そうでなければ、キリストはいきなり天界へ行つてしまつて、

「私の真似をしろ」

ということなんです。我々はキリストの真似はできない。キリストは我々に一つも水を割らずにズバリズバリと仰る。それで何が福音かと。不可能なんだ、全部。キリストの言は私たちには不可能なんだ。その不可能な言葉を与えておいて、福音だと言う。喜びのおとずれだと言う。どこが喜びのおとずれかということですね。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人の有なり」

とは、誰が本当に霊が貧しいか。それは、

「私を受けとりなさい」

と、キリストは実力の裏付けをもつて、ものを言っている。だから、実力者キリストを受けとるまでは、キリストの言葉が福音にならない。ところが、キリストを受けとらないで、キリストの言葉や行為を一生懸命で真似しようと思つて、努力精進がんばつたつて、これはくたびるだけで、どうにもならん。それが、この

「我は火を地に投ぜんために来たれり」



という烈しい言葉です。

●霊火

ところで、この「火」というのを、創世記から黙示録まで私は少し調べた。火にはいろんな種類の火があります。けれども、キリストのこの聖言に関連したような火のところを多少拾って、これから学んでいきたいと思います。

最初は、出エジプト記3章、

「モーセその妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧^かいおりしが、その群を曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに、²エホバの使者^{つかい}棘^{しほ}の裏^{なか}の火焰^{ほのお}の中に²彼にあらわる。彼見るに棘火^{しほもゆ}に燃れどもその棘焼けず」(出エ3:1)

(2)

この火です。このモーセが見た火は普通の火ではなかった。霊火^{れい}であつた。だから柴が燃えない。エホバの神が、あるいは神の使いといつていいが、火焰の中にあらわれた。「火焰」と書いてあるが、ヘブライ語でもやはり「火焰」という言い方になっていて、「火」という字が出ている。ヘブライ語で「火」というのは「エーシュ」という字です。

モーセが神さまに出会^でうが、その出会いの時に、霊火、霊的な火という現象において神の使いが現れる。神の使いかと思つていると、今度は、エホバの言が出てくる。

「即ち²神棘の中より、モーセよモーセよと彼を呼びたまひければ」(出エ3:4)

霊火の背後から、今度は、霊言、霊的な言葉が、神の言が現れる。

「我は汝の父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なり」(出エ3:6)

我が民はエジプトで悩み苦しんでいるが、それを助けてやろうと思つて、

「われ降りてかれらをエジプト人の手より救いだし云々」

と。そして、カナン人の住んでいる所へ、約束の地へ連れて行くという。

「エジプト人が彼らを苦しむるその暴虐を見た」

からなのだと。エジプトにいたときは大体300年位かかつている。ヤコブの後にヨセフが出て、これが非常な働きをした。神さまはモーセに、

「お前が行つて助けろ」

と。モーセは、「私にはできません」と。有名な所です。

「神モーセにいたまいけるは我は有りて在る者なり」(出エ3:14)

これを、

「我は在りて在らしむる者なり」

と私は訳す。神さまが在るということは、人を在らしめている。こつちが信ずると信じないとかかわらず、我々は神の恵みで在らしめられている。太陽が在ることが、地球を在らしめていることと同じだ。私は太陽を見て、この言葉は実は、



「在りて在らしむる」

ということだというインスピレーションを受けたわけです。世界中にそういう訳をしているのが居ない。仕方がない、これは本当だから。そんなところは、いわゆる文法を超越しなければ。言葉にあまり執すると、実は神の根源語、神さまの根源の気持が反つてとれなくなる。

これが、その火なんです。霊火です。霊火において現れた。それから、出エジプトする時、

「^{かく}斯てかれらスコテより進みて^{あらの}曠野の端なるエタムに^{まくはり}幕張す。エホバかれらの

前に往きたまい、昼は雲の柱をもてかれらを導き夜は火の柱をもて彼らを照

らして昼夜往きすすましめたもう」(出エ13・20～21)

よく、「天から火を降す^{くだ}」というような言い方が他のところにも出てきますが、霊的な火の輝きが現れるわけです。

「民の前に昼は雲の柱を除きたまわず。夜は火の柱をのぞきたまわず」(出エ

13・22)

とにかく、不思議なことだ。この「雲」もどうも普通の雲ではないようです。なにしろ、葦の海を渡るときに水が両方に分かれてしまう。あの「十誡」という映画にも出てくるようにね。自然の法則を乗り越えたところの霊の法則が、また力が働くわけです。

今度は、モーセが導かれて、モーセに何が与えられるかというと、例の「十誡」のことです。律法が一番もところ。

「かくて三日の朝にいたりて^{いかづち いなびかり}雷と電 および密雲山の上にあり。又^{らつぱ}嗽叭の声

ありて甚だ高かり營にある民みな震う」(出エ19・16)

「ラッパの声」とは、別にラッパがあるわけじゃない、これはいわゆるラッパじゃないでしょう。

「モーセ營より民を引きいでて神に^{あわ}会しむ。民山の麓に立つにシナイ山^{すべ}都て煙を出せり。エホバ火の中にありてその上に下りたまえばなり。その^{かまど}煙竈の煙のごとく立ちのぼり、山すべて震う」(出エ19・17～18)

霊震が起きている。そういう現象の後で、神さまは十誡を下した。しかも板に、神が火をもつて、火の力をもつて文字を書いた。だから、律法も、霊火という現象の時に現れて与えられたので、律法自身が非常に霊的な力を持ったものだ。

● 十言

申命記の4章にやっぱり十誡のことが出ている。

「時にエホバ火の中より汝らに言いたまいしが、汝らは^{ことば}言詞の声を聞くのみにて声の外は何の像をも^{ほか}見ざりし。エホバすなわち其契約を汝らに述べて汝らに之を守れと命じたまえり。是すなわち十誡にしてエホバこれを二枚の石の



板に書^{しる}したもう」(申命記4・12～13)

「十誡」とは言わないんです。ヘブライ語では「十誡」でなく「十言」という。「アセレス・ハツ・デバーリーム」というヘブライ語です。「十言」、十の言葉。「戒め」ではない。

「汝、我面^{わがかお}の前に我の外^{ほか}何物をも神とすべからず」(出エ20・3)

原文は、本当は「すべからず」という戒めではない。

「汝にとつては、我が顔の前には、私の外^{ほか}には神はいない」

「私の顔の前には神がないが、私の顔の前でなければ、神々はあるんだよ」

ということなんです。他の民族には他の民族の神々がある。それは認めないんじゃない。

「私の顔の前には、お前にとつては私だけが神だ」

と、こういう言葉ですから。「すべからず」じゃないんです。

「他にはないぞ、お前とは一対一の関係で、イスラエルの神は私だ。他の民族にはそれぞれ神々があるだろうが、そんなことはお前には関係ない」

と。「拝一神」である。唯だ一人の神。人格関係とはそういうものです。「一対一」の関係なんだ。世界観的に他に神がない、と言っているんじゃない。ところが、預言者になると、

「もう他には神はない、本来はエホバだけが神だ」

ということに、後にはなつてきますけれども。大事なことは、神があるかないかということ。日本にも神々がいる。八百万^{やおろず}の神が、天照^{あまてらす}なんか。いろんな民族はそれぞれ持っていますよ、それを否定してはいけない。結構でございまして。ただ、

「イスラエルにとつてはヤーヴェーだけが神だ」

と。「すべからず」じゃない。

「私だけが神だよ」

と言っているだけのなし。だから、十の「言」なので、「誡め」じゃない。

「汝^{おのれ}自^{おのれ}のために何の偶像をも彫^{きざ}むべからず」(出エ20・4)

「彫まないねえ。私が神であつて、偶像なんかになりはしないぞ」と。

「汝の神エホバの名を妄^{みだ}りに口にあぐべからず」(出エ20・7)

「口にあげない」ということ。

「安息日を憶えてこれを聖潔^{きよく}すべし」(出エ20・8)

こここの所は、ちよつと命令になつていますけれども。それから、

「汝の父母を敬え」(出エ20・12)

「敬うことだ」という言い方になつて、ちよつと名詞的な言い方になつている。

「汝殺すなかれ」(出エ20・13)

「汝は殺人しない。私がお前の神だから、お前は殺人なんかしない」という、相手を信じている言葉なんです。「ロー」というヘブライ語は、何々「しない」と



いう否定なんで、「アル」と言つたならば、何々「してはいけない」という禁令になる。この十言はみんな「ロー」が使つてあるので、「アル」でない。「ロー」が使つてある限りは、これは断定してものを言っている。

「お前は殺人しない。」

お前は姦淫しない。

お前は盗まない。

偽りをたてない。」

という、本当の信愛関係なんです。

戒めで、「すべし、すべからず」だったら、それは「おきて」になる。だから、「モーセの律法」なんて言つたつて、それは或る意味においては、律法的な指図さしず的なものは派生はしているでしょう、人間はダメだから。けれども、本来は、相手を信じかかつてものを言っている、信愛している言葉なんだ。世界中、この信愛ということが本ものになれば、平和に必ずならざるを得ない、ということだ。

イスラエルの神とイスラエルの民の関係は、信愛関係で、実は律法ではなかった。それを律法としてしまつてゐるのは、「トーラー」という律法にしてしまつてゐるのは、本当は、歴史的に神の本義をとりそこなつてゐる。そういうことを言う学者がいるか、いないか知らんよ、私は。

キリストは、はっきりそれをとつた。だから、いわゆる律法よりも、キリストの言葉の方がはるかに上なんです。山上の大告白はモーセの十誡以上です。まあ、大変な人なんだ。だから、キリストは十字架に懸けられるのは、もう当然なんです。

「そんな次元じゃないぞ」

というのがキリストの世界だから。キリストを瞑想していると、もう言葉がなくなる。説明がいやになる。私の『無の神学』がキリスト教界で受けとられないのは当然なんです。この世界に入らなければ分かりはしない。「無」と言うと、虚無だと思つてゐる。冗談じゃない。ニヒリズムじゃない。

●火の如き福音

これ(十誡)は信愛関係の「隠れたる福音」なんです。いわゆる律法じゃない。「顕あらわなる福音」は今度はキリストがなさつた。律法を完全にもつと強い次元でもつて満たして、いわゆる律法の世界を要らなくしたのが、イエス・キリストの福音なんです。しかし、この福音がものすごいものだから、そのキリストの言葉を一生懸命で守ろうとすると、またキリストの言葉を律法にしているから、いつまでたつてもダメです。

キリストの言葉を生きるためには、キリストそれ自身に、イエスそれ自身の中に自分を投げ込むまでは、受けとれない。祈りとは、本当に自分を投げ込むこと、キリストの懐の



中に入ることです。キリストの懷に入ってから、個々の祈りをしなさい。本当の祈りはキリストの中に祈り入ること、祈入すること。よく「己を捨てろ」なんて言うね。どこへ捨てるのか。

「キリストの中へ自分を捨てたらいい。投身するんだ」
と。我々の福音は火の如き福音なんです。

「この火燃えたらんには」

と。モーセのいわゆる十誡、十言も、火がシナイ山に燃えているその現実においてあった。申命記に、

「汝の神エホバは焼き尽くす火、嫉妬神なり」(申命記 4・24)

「焼き尽くす火」と書いてある。我執という罪を、生まれつきの我を焼いてしまう。焼き殺してしまう。そういう言い方は躓くような言い方であまりよくないけれども。「妬む」^{ねたむ}とはサタンに対しての妬みです、悪霊に対しての。

「悪霊にとつ捕まつては大変だ」

と、神さまは私たちの一人一人の魂をサタンから奪い返す。その気持を持った愛なんです。その気持をもった愛が即ち「妬み」という。「ジェラシー」というこの言葉は嫌な言葉だけれども、ものすごい熱愛を「嫉妬」^{ねたみ}という言い方で言っている。「キヌアー」という言葉です。いわゆる

「妬みはダメだ」

ということはもちろんパウロが言ってます。いわゆる嫉妬の気持、そして争いは——女の人は妬む気持がとかくある、男は争う気持がある——

「妬み争いはけしからん」

とパウロが言っているとおりの。ここはそういう妬みではない。

仏教の方は、感情の世界を殺して、澄んでしまうようなところがあるけれども、福音の世界は非常に情熱が強い。その情熱は地的な情熱でなくて、天的な情熱である天来の火です。

私は藤井武先生がこんな文章を書いているのを忘れていた。見つけてびっくりした。

「かつては私に真理に対する渇きがあった。自然に対する渇きがあった。家庭に対する渇きがあった。聖き事業に対する渇きがあった。しかしながら今、私はしばしこれらのものを忘れる。今、私の魂の渇き求めるものはただ一つである。然り、ただ一つである。神である。活ける神である。生きて私と相抱き得るもの、その懷の中に私の飛び込み得るもの、私の痛みを説明なしに悉く解し得るもの、大なる暖かき手をもって私の手を堅く握り得るもの、信実に私と共に泣き得るもの、そして私の涙を拭い得る者。ああ、かくの如き人格者を私は今せつに渇き慕うのである。悩める魂の父なる神、愛なる活ける神、彼の顔を私は今、眼の当たり仰ぎ見たい。それでなければやりきれない。彼の言葉を私はいま鮮やかに聞きたくてたまらないのである。」



先生のこの文章がどこにあったか、まだ調べていませんけれども、先生がこの時、なぜ「キリスト」と言わなかったか、私は不思議でしようがない。キリストは、藤井先生のこの渴きを満たしてくださる方なんです。そこをただ「活ける神」と言っているだけで、

「へえー、そうかなあ」

と思う。後でイエスのことを大分深くお書きになっていますけれども、要するに、藤井先生も聖霊のまだ手前だった。先生の詩の中で、聖霊のことを書いている所は素晴らしい。けれども、それは思索の上で書いているので、本当の実感から告白しているのとは違う。

内村先生の直弟子たちはみな優れた人達ばかりです。ところが、結局、聖霊の世界に本当は誰も来なかった。塚本先生は最後に

「自分は間違っていた」

とおっしゃった。先生方を人間的に尊敬することとこれは別問題です。私は人間的には尊敬しています。けれども、この福音の世界の、パウロの焦点となつているところの、使徒たちの焦点となつているこの聖霊の世界は、御霊なるキリスト、キリストなる御霊——それは十字架が土台ですよ——こればかりはしょうがない。

だから、ルカ伝12章のこのキリストの言はすごい。

「火を地に投ぜんために来た」

しかも、その火はいきなりやるわけにいかないで、

「受くべきバプテスマがあつて、思い迫ることいかばかりぞや」

という。十字架のことです。

「十字架はどうしても自分が受けなければならないバプテスマなんだ。そうし

たら聖霊を与えるから、祈つて待つていろ」

これがペンテコステになる。ルカ伝の12章の49節、50節は要するに「聖霊と十字架」を語っている。「受くべきバプテスマ」とは十字架のことですから。キリストだけが受け得るバプテスマで、我々はダメなんだ。贖罪のバプテスマだからね。

左手にコーランを持つて右手に剣を持つているようなマホメット教とおよそ違うんだ、冗談じゃないよ。本当に東西を融合することのできる宇宙的なものは、このキリストの福音だけです。

藤井先生も非常に飢えていた。

「我を見し者は父を見しなり」

ということは、藤井先生だつてちゃんと知つてはいらっしゃるんだ。本当にキリストに来るということは、中に自分を投げ入れるということは、聖霊の世界を、御霊のバプテスマを受けるまでではない。



●四位一体

「アロン民にむかいて手を挙^{あげ}てこれを祝し、罪祭^{はんさい}燔祭^{おえ}酬恩祭を献ぐることを畢^{おえ}て下れり。モーセとアロン集会の幕屋にいり出^{いで}きたりて民を祝福せり。斯てエホバの栄光すべての民に顕れ、火エホバの前より出て壇の上の燔祭^{はんさい}と脂^{あぶら}を焼きつくせり。民これを見て声をあげて俯伏^{ひれふし}ぬ」(レビ記9・22～24)

「集会の幕屋」というのは神さまとの「出会いの幕屋」です。住む幕屋と違う。これも霊火です。しかも、これは霊火でありながら、力を持つているから、焼けてしまった。

「火が来て焼いた」ということは士師記のギデオンのところにでてくる。

「エホバの使手^{つかい}にもてる杖の末端を出して肉と無酵^{たねいれぬ}パンに触れたりしかば、巖^{いわ}より火燃えあがり肉と無酵パンを焼き尽せり。かくてエホバの使去^{つかい}りてその目に見ずなりぬ。ギデオン是において彼がエホバの使者なりしを覚^{さと}り、ギデオンいいけるは、ああ神エホバよ、我面^{かお}を合わせてエホバの使者を見たればはた如何^{いかん}せん。エホバ之にいいたまいいけるは、心安かれ怖^{おそ}るる勿^{なか}れ汝死ぬることあらじ。ここにおいてギデオン彼所^{かしこ}にエホバのために祭壇を築き之を

エホバシャロムと名づけたり」(士師記6・21～24)

「火燃えあがり肉と無酵パンを焼き尽せり」

と、これでこの神さまは力のある本当の神だということをギデオンは覚る。神に出会ったら、こっちは死ぬというような気持を持っていたから、「心配するな」と。

「心安かれ」という言い方は、キリストもペテロに言われました。

「平安、汝に在れ」(シャローム・レカー)

という言い方です。「エホバシャロム」「平安の神」と名付けた。これは絶対に「平和」と訳してはダメです。私は封筒の上に必ず「平安」と書く。あなたに平安がありますようにと。平安のないところに平和なんかありはしない。それは偽りの平和だ。神さまとの関係がちゃんと立っていないところに、本当の平和はない。人間の関係がどんなに良さそうに見えても、いつ崩れるか分からん。ところが、神さまとの関係は崩れない。崩れたら、自分は滅びる。

「神—キリスト—聖霊—我」

の「四位^{よんみ}一体」という。「四位一体」なんて普通の人は言わないんだ、「三位^{さんみ}一体」とばかり言ってる。三位一体だけでどうなりますか。「神・キリスト・聖霊」が三位一体で、我々はどうなるんですか。我々との関わりを持たない三位一体なんてどうにもならん。四位一体だ。三位一体ということを神学的に何のかのと議論しているのは、バカみたいなもんだね。どうしてああいうバカな議論をしているかと思う。

「神さまは霊だ」

とキリストが言っているじゃないですか。「霊」ということは「聖霊」ということです。神



さまの中には聖霊がある。自分の中にも聖霊がやってきた。聖霊は神・キリストの媒介者です。この三つは離れることができない。それぞれ、「神・聖霊・我（キリスト）」であるけれども、これが完全に同質的になっているから、これを三位一体というので、どこが悪いんだ。大詩人ゲーテもそこが分からなくて困った。その点はちよつとゲーテさんもダメだけれどもね。私の詩の中には、はつきり四位一体が出てくるから。

●キリストの十字架の碎け

しかも、これは立派な人間じゃない。破れ器なんだ。破れ器だから、

「我は罪びとを招かんとて来れり^{きた}」

とキリストは言われた。自分を「罪びと」としない者はキリストとは関係ないんだ。

何も、天野先生の悪口を言うわけじゃないけれども——天野先生は

「神は愛なり」

と書いた——天野先生は

「どうも僕は十字架が分からない」

と言うから、

「先生はあまり立派過ぎるから」

と言ってやった。

「本当は小池君みたいな信仰を持ちたいんだけどね、私のは哲学的信仰というんだ」

と。そのとおり。

私みたいな奴は躓きの人だから、

「もういい加減にしよう」

と出て行つたのがあるよ。私は一つも追わない。

「ああどうぞ出て行ってください。もつと立派な牧師さんのところへ行ってください。それで本当の福音がつかめたら」

と。冗談言うなど。手島さんや私は人間的には欠陥だらけな男だ。だけれども、そこに本当のものがやって来ている。神さまは使ってくださいさる。

「我々の心は詩篇51篇のように碎けなくてはいかん」

と言うが、「本当に碎けるか」と言うんだよ、私は。人間の心が本当に碎けるならば、十字架は要らない。碎け切れない奴だから、だからキリストが十字架で碎かれた。イザヤ書53章です。この「碎け」を賜り、^{たまわ}本当の破れを賜る。全部「賜る」んです。破れているのに、破れてないような顔をしているのは偽善者だ。

「わが名のためにお前は憎まれるぞ」

と、その通り。私は憎まれている。いいよ、それで。キリストは、神さまに本当に全的に



信頼したキリストが十字架上で何と叫んだですか、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄てたまひし」

と言われた。

「神さまにまで私は棄てられたか。どこに行ったらいいのですか、あなたに棄てられたら」

というわけだ。あの言葉があるから凄いです。キリストがああ叫びをしなかったら本当じゃない。

「棄てられるはずのない私が十字架に棄てられるとは何事だ」

ということなんです。贖罪の十字架を否定しているような言葉なんです。完全に逆説的な言葉です。

「私をこうやってお棄てになったから、彼らを赦してやってください」と。彼があとで

「彼らを赦したまえ」

というのは、

「棄てられている私だから、赦せる」

と、こういうことなんです。全部、罪びとの首^{かしら}になったんだ。

パウロは、

「我は罪びとの首^{かしら}なり」

と言った。内村鑑三も、

「私はしょうがない野郎だから、私も罪びとの首だ。だから万人が救われるんだ」

と、彼は戦場ヶ原で語った。私は第三番目の罪びとの首だ。私が救われたから、あなた方は皆救われます。私は天国に最後に、天国の扉が閉まる一番後に私は入って行きます。私の詩ではそういう告白をするかも知れない。

とにかく、人間はどうにもならないです、神に立ち帰るまでは、本当に平伏すまでは。しかし、平伏し切らないから、キリストは全部これを十字架で引き受けた。大変なものです、キリストの十字架というのは。キリストは

「我みずから懸かるのである。自ら棄てるのである」

と言った。

「お前たちに形はとつ捕まえられても、本当はとつ捕まえられたのではない。イザ

ヤ書53章を私は身をもつて証しするために十字架に懸かるんだ」

と。弟子たちはかなり従っていたけれども、とうとう終いには弟子たちも従えなかった。マグダラのマリアだけだ、本当にキリストに従ったのは。七つの悪鬼を追ひ出された女です。ナルドの香油の壺を割って全部これをキリストの頭に注いだ。あれは彼女の本当の全身的な献げの気持なんです。



「⁵¹われ地に平和を与えんために来ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。⁵²今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。⁵³父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑は嫁に、嫁は姑に分かれ争わん」(ルカ12・51～53)

「それでは、私たちは喧嘩するのがいいか」

と、そういうことじゃない。本当の真理を、生きた真理を、キリストを受けとると、どうしてもそれは生まれつきの自分たちには合わない。血はつながっていても、それは本当の親しみにならない。けれども、

「私を受けとれば、私を通して神さまを受けとれば、本当の、血のつながり以上の間柄になるぞ」

と。これが、

「クリスチャンは兄弟姉妹だ」

という所以^{ゆえん}なんです。地上のいろんな関係はある。けれども、霊的な意味で全部兄弟姉妹だ。

●火の預言者

「エリヤこたえて五十人の長にいいけるは、われもし神の人たらば、火天より降りて汝と汝の五十人とを焼き尽くすべしと。火すなわち天より降りて彼と

その五十人とを焼き尽せり」(列王記略下1・10)

すごいね、これは審判だ。審判の火だ。何回もやった。全く、神の人、火の人だ。エリヤは霊火^{い、い}人だ、霊火の人だ。アハジアが別の神さまを拝んでいるから、冗談じゃないぞと。エリヤがアハジアに、

「エホバの神さまはこういう神さまだ」

と。アハジアは参つてしまう。10節、12節、14節と三回やっている。

そして、今度は、エリヤが天界に行くときはどうですか。

「彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらわれて二人を隔てたり。エリヤ

は大風にのりて天に昇れり」(列王記略下2・11)

火の車と火の馬がやってきて、その戦車みたいなものに乗って、天界の風が吹いてきて、どこかへ行ってしまった。エリヤは死なないで見えなくなった。

「いや、どこかへ落ちてるはずです」

とか言つて、探しに行つたところが、一向にみつからなかったと書いてある。

「それなら捜してみろ」

とエリヤが言つたんだ。いくら捜しても見つからないものだから、

「やっぱりエリヤは天界へ行つてしまつたんだなあ」

と、面白いことが書いてある。



私はバカだから、聖書をその通り私は読んでますから。皆さん、少しバカにならないければダメだよ。あんまり利口過ぎてしまつてね。今の子供は利口過ぎてしまつて、受験勉強で妙な利口になつてしまつてしょうがない。もう学校なんかみな解散して、全部本当の塾にすればいいんだ、吉田松陰の塾みたい。幼稚園から大学まで貫いているような本場の学校ができて、受験勉強は要らないということにならなくては。青少年が悪いんじゃない。教育者と政治家が悪いんです、そういうような構造にしてしまっているのが。

エリヤは火の預言者です。エリヤの弟子のエリヤもすっかりエホバの霊を受けとつて、

「エリヤ祈りて願くはエホバかれの目を開きて見させたまえと言ければ、エホバその少者の^{わかきもの}眼を開きたまえり。彼すなわち見るに火の馬と火の車山に^{みち}盈てエリヤの四面に在り」(列王記略下6・17)

これは何かに囲まれた時、エリヤは出かけて行つて、大軍を恐れることはないと言つて、やつたところだ。同じようなことが書いてある。

●愛の炎

それから、ちよつと種類は違いますがけれども、愛がいかに火のようなものであるかというところが雅歌書に書いてある。

「6 われを汝の心におきて印^{おしで}のごとくし、なんじの腕におきて印のごとくせよ。其は愛は強くして死のごとく、嫉妬は堅くして陰府^{よみ}にひとし。その焰^{ほのお}は火のごとし。いともはげしき焰なり。7 愛は大水も消すことあたわず。洪水も溺らすことあたわず。人その家の一切の物をことごとく与えて愛に換^{かえ}んとするとも尚^{なお}いやしめらるべし」(雅歌8・6～7)

これはシユラムの女と牧者との深い恋愛の詩です。結婚するんでしようけど。

「汝の心におきて印^{おしで}となし」

というのは、まるで入れ墨みたいにしろというわけだ。「愛」と「嫉妬」は同じ意味で使っている。愛の炎は火の炎だ、消すこともできない。どんな宝もダイヤモンドもこの愛とは比較にならない。我々の愛はそういう愛だという。これが火だ。霊的な愛だ。正しい深い意味での恋愛の詩としては、雅歌書にかなうものはないですよ。ゲーテがこれを読んで驚いた。彼は雅歌書が好きで、自分で訳もしたくらいです。『ファウスト』の中にも出てきます。

「イスラエルの光は火のごとく、その聖者はほのおの如くならん」(イザヤ10・17)

「聖者」とは神さまのことです。エホバの神さま。イザヤは神さまのことを「聖者」と言っている。聖なる者。

「ヤコブよ、なんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う。イスラエルよ、汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なん



じの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。2 なんじ水中^{みずのなか}をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中^{ひのなか}をゆくとき焚^{やか}るることなく火焰^{ほのお}もまた燃えつかじ」(イザヤ43・1～2)

「もう贖つてしまった」

という。「呼べば、贖う」じゃなくて、

「もう贖つてしまったから。お前^{もの}の名を呼んで、汝はわが有である」

と。「心頭滅却すれば火もなお涼し」という言葉があるが、心頭滅却じゃなくて、もう身体に聖霊の火が満ちているものだから、火が熱くないというわけだ。クリスチャンは本当はみ霊の火の人、霊火人なんです。

「火を投ぜんために来^{きた}れり」

に対して

「その火は受けとりました」

と、キリストに我々はそう言えるわけです。

「7 エホバよ、汝^{すす}われを勧めたまいてわれ其勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々^{わらひ}に人の笑となり人皆我を嘲りぬ。8 われ語り呼^{よば}わるごとに暴逆^{しえたげ}残虐の事をいう。エホバの言^{ことば}日々^{あざけ}にわが身の恥辱^{はずかしめ}となり嘲弄^{あざけり}となるなり。9 是^{され}をもて我かかねてエホバの事を宣^のべず又その名をもてかたらしといえり。然^{しか}どエホバのことば^{わが}我心^{こころ}にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるごとくなれば忍耐^{しのぶ}につかれて堪^たえ難し」(エレミヤ20・7～9)

「語らないで居ようとしたところが、神さまの聖言が火のように自分の骨の中で燃えるごとくなつて、とてもこれは、こらえるわけにいかないから、やつぱり言います。仕方がない、預言せざるを得ない」

と。だから、「預言者の思想」なんていう言葉があるが、「思想」じゃないです、預言者が言っているのは。預言者が考えてものを言っているんじゃない。

「神さまに示されて神さまの言葉が入ってきて燃えるから、言わないではいられない」ということです。

私は日曜の話がそうだからね。しゃべっているうちに、上から力が来てしょうがない。預言者や使徒たちが天界で嘆いているよ、今のキリスト教は一体何だと。

「パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、イザヤよ、エレミヤよ」

と、友達のように言えるような境地に入らなければダメなんです。み霊の世界はそうなんだ。

●霊火人

ダニエル書の3章のところに、火の燃えている所に投げ込まれたけれども、燃えつかなかったと書いてある。凄いね、ダニエルというのは。獅子も噛みつかない。



それから、聖霊の預言をしたところのヨエル書。2章の3節に書いてある。

「火彼らの前を焚き^や火焰^{ほのお}かれらの後にもゆ」(ヨエル2:3)

それから、審判の火としては、アモス書1章にさんざん出ている。

「あらゆる国が神さまの審判にあつて、火で燃やされてしまう」

という。これは審判の火だ。

新約聖書の大事なところはマタイ伝の3章です。

「我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力^{ちから}あり、我はその靴をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん」(マタイ3:11)

洗礼のヨハネがキリストを指して、

「あのひとは聖霊と火でバプテスマを施す^{ひと}霊止^とだ」

と。「聖霊と火」ということは「聖霊の火」と同じことです。聖霊の火でもつて、火のような聖霊でバプテスマをする。それを地上ではなさらなかった。これが今日の主題のルカ伝12章の49、50節なんです。

「受くべきバプテスマあり」

と。キリストのいうこのバプテスマは十字架ですから。

「十字架を受けて、贖罪が済んだら、そうしたら今度は火を、み霊の火を投ずる。だから祈つて待つていろ」

と。彼らは祈つて待つていたら、俄然、降りてきた。これがペンテコステの使徒行伝2章。そういうわけです。

「烈しき風の吹ききたるとき響、にわか天より起こりて、その坐する所の家に満ち、また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各々のうえに止まる。

彼ら聖霊にて満され、御霊の宣べしむるまに^{ことごとく}異邦の言にて語りはしむ」(使徒2:2~4)

「異邦の言」ではない、これは異言のことです。異言で語りだした。異邦の言葉も、知らない言葉もしやべりましたよ、全部これは異言なんです。サンダーシングが英語を知らないで、英語を知っている人たちにしゃべろうと思つたら、英語が出てきた。これも高次な異言ですから。まあ大変な世界です、こういう次元になるとね。

「火」には審判で焼き尽くす火と、本当に人を救い上げる火と、二つある。聖霊の火は救い上げて活かす、新しい生命を与える火です。黙示録に出てくる火は審判の火が多いね。滅ぼされてしまう。我々は霊火^{れい}人^{にん}です。み霊の火の人。そうならざるを得ないです。キリストを本当に受けとれば、霊火人たらざるを得ないというはなしだ。

